総合学習「岡田米PR大作戦」

Ｈ１９年度　５学年　５４名　作成

米の病気

＜馬鹿苗病＞
種子消毒に用いられる薬の効かない菌（１９８４年に多発生したが、減少けいこうにある。）

＜苗立ち枯れ病＞
茎の根元から芽がバタバタとたおれて枯れ死してしまう。

＜シラガハレ病＞
葉脈にそって黄色い波型のはんてんができて、その後白く枯れる。

＜いもち病＞
作物最大の病害。昭和５５年に多発生して２万トン以上の米の被害がでている。（気温が１７～２４℃のときや、湿気が多いと菌がまんえんして広がる。）

米の害虫

＜コブノメイガ＞
　成虫は体長１センチぐらいの小さなガ。７月ごろ、中国・東南アジアから風に乗ってはるばる日本までやってきます。日本の水田で増殖し、その幼虫が葉っぱ食べてしまいます。葉を巻いてそんおなかに潜むので、薬がかかりにくく防除が難しい虫です。１年に２～３世代を繰り返します。収穫に与える影響の大きな害虫です。日本は寒すぎて冬を越えることができず、全滅してまいます。

＜トビイロウンカ＞
　稲にとって最大の害虫がこの虫です。大発生すると田んぼが全滅することもあります。中国・東南アジアから飛来してくる虫で、運良く日本にたどり着いた成虫は続々と子供を産みだし、猛烈に増殖します。体長は５ミリぐらいのセミの仲間です。こいつも冬を越えることができず、全滅してしまいます。
　変わった生態をもつ虫で、まずは飛ぶことの出来る羽をもった虫がやって来て、稲に到達すると次の世代からは羽の短い虫が続々生まれてきます。どんどん増えて密度が限界に達するとまた羽の長い虫が生まれてきて次の稲へと飛んでいきます。

＜ホソハリカメムシ＞
　カメムシ類は成虫も幼虫も稲に寄生して、もみの汁を吸います。収穫された米にはその跡がついて、商品価値が無くなってしまいます。冬の間は他の草や樹の上で冬を越えます。そして、春から色々な植物の汁を吸いはじめ、夏には稲にやってきます。

＜イネミズゾウムシ＞
　１９７０年代にアメリカから侵入してきた害虫です体長は１センチ以下の小さな虫です。田植え直後の小さな稲を食べます。食べられた稲は成長しても十分に茂ることが出来ず、減収してしまいます。１年に１世代だけです。岡田小の水田にもよく現れます。

＜ドロオイムシ＞
　東北、北陸地方など寒冷地で発生が多く、葉を食べる害虫である。島根県では山地および平地の山沿いの水田で多発生していたが、被害は減少している。岡田小の水田にもよく現れます。